巻頭言
『成熟と喪失』から四十年

総合科学研究科副研究科長
樫原　修

昨年の暮れ、ある雑誌から江藤淳論の依頼を受けたのを機会に、江藤の著作をまとめて読み返した。かつては単に論理を追うだけであった作品にも、江藤の一貫した内的動機を見いだせた思いがし、自分にとっては大変有益な読書であったが、その中で改めて確認したのは、『成熟と喪失』がいまだに古びない名著であることであった。

『成熟と喪失』は、一九六〇年代に江藤淳が、同時代の作家（いわゆる第三の新人）たちの作品から母性崩壊の徴候を読み取り、それを、日本の「近代」は結局「母」を自分の妻に置き換えてしまうのだが、妻の方はすでに題として捉えた作品である。江藤は、現在の妻たちと同じく「母」は自分うした発想を得た背景には、一九六四年に二年ぶりにアメリカから帰ったとき、きに感じた、「あまりに急激に進展している日本の産業化に対するおどろき」があったと述べている。日本社会の伝統的な在り方を母性原理に見いだした上で、それが急速に変容する様を見たわけである。

江藤は、エリック・H・エリクソンに拠りながら、母性原理を「農耕社会的な」ものだとし、牧畜民の文化の父性原理と対比しているが、それ自体は、講談社文芸文庫版の『成熟と喪失』に付された解説で上野千鶴子氏がいうように「はいる」学生諸君の）姿ではないのかと思いの枠組の自画像のあまりの愚かしさにみの陳腐さにもかかわらず江藤の論が全面からである。ここから脱却するのは、「近代」にはいってから、者は生産階級とし、かつての日本にはあったのあいだでのことである。生産（の機が考える）儒教の「天」の回復を祈放逐され、「母」であることにだけ存在証明がかかるようになった「専業の主婦」は現実に立脚する文学者の在り方か成立してからのことである。しかし微妙に変化していったと思うのだが）、「育てる母」「教育する母」は、それが観念的な解決法でしかなかったとの初めから、自分の「作品」、すなわち「子」が「崩壊」っを「父の欠落」に置き換える問題供の出来で評価を測られるよう見逃していないからである。江藤は妥協は巧妙な回避があるように」思章太郎の『海辺の光景』の母子の形成である。そうではなく、江藤の小宇宙の機微を見事に描いて見せた日本人の自画像の正確さを、母を捉えている感情が「伝統的な農民的な感情のなかに安住」続けていること、日常の中で深く自覚しるなら」生まれるはずのないものだと書いること以外に道はないのではないているし（そうした小宇宙は成かと自問する。

時に自壊作要）には成熟

最後になったが、上野氏の解説の表題は『『成熟と喪失』から三十年」というのであった。その解説から、今はさらに十余年が経っているのであるが、これは今現在の問題であり、「成熟」はいまだに課題であり続けているというのが私の理解である。学生諸君はどう思われるであろうか？

いる作品である。江藤の論を紹介しながらこれらの作品について語っていく時、私はほとんど若い頃の自分を語っているような痛さを感じる。彼ら彼女らの未成熟さは、私の（そして実は向こう側に座